

平成24年6月7日の中日新聞に『新都市病院』が紹介されました。

前立腺全摘出手術を前に、導入した内視鏡を説明する伊原部長＝磐田市中泉の新都市病院で



磐田市中泉の新都市病院は、がん治療などに利用する3D立体内視鏡装置を導入した。従来の二次元内視鏡では難しかった奥行きや距離感が把握でき、難度が高い手術がしやすい。泌尿器科の前立腺全摘手術などに活用する。

(赤野嘉春)

立体画像で手術正確

3D内視鏡装置を導入

磐田の新都市病院 前立腺奥行き鮮明

小型で高解像度の二眼式偏光レンズを内視鏡に搭載。執刀医は3D映画を見るように偏光ゴーグルを装着し、傍らのモニター画面に映し出された患部を見ながら手術を行う。一台二千万円。県内での導入は初めて。

同病院は腹腔鏡を使った前立腺がんの手術数が年間八十件と県内最多。高齢化の進展で患者数はさらに増えるとみて、五月に導入した。すでに三件の手術を執刀した泌尿器科の伊原博行部長(四七)は「肉眼のように画像が鮮明。患部の奥行きが分かりやすく手術の間が一つ省けたようだ」と話す。今後は胆のうの摘出や鼠径ヘルニア手術など外科領域でも利用していく。